

| | |
|--------------|---|
| Title | 王仁塚 |
| Author(s) | 片山, 長三 |
| Citation | 懷徳. 1955, 26, p. 73-79 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/90288 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

王仁塚

片山長三

枚方晋代節雄氏より王仁塚について記述するようにとの書翰により、ふだん私は王仁塚の下の村に住んでいたので、こゝにその資料をまとめることとした。

王仁塚とは應神朝に來朝した博士王仁の墳墓のこと、大阪府北河内郡津田町藤坂一の背の御墓谷上ということになつてゐる。片町線長尾驛からは東南數町のところで、最初から今の地に一個の自然石がおかれていたが、昔は誰とて何の石であるか知らなかつたらしい。享保十六年京都の儒家並河五市郎氏がこの地に來て、禁野和田寺にいたり、住侶西村道俊誌すところの王仁に關する古記録を見て大いに感ずるところがあつた。その記録とは次の如きものである。

王仁墳廟來朝紀

夫百濟國博士王仁者、漢高帝之後裔、有_レ白鬻者。鬻之後王狗轉至_二百濟_一。當_二百濟久素王時_一、我朝第十五代譽田天皇獻宇十六年乙巳春二月遣使召_レ文人。久素王

即王狗之孫王仁來貢焉。則來朝以_二難波津仁咲屋此花冬籠之哥詠_一、奉_レ祝_二我朝萬歲_一。應神天皇歡感、以_二百濟王仁學士_一。則_二皇子菟道稚郎子及大鷦鷯皇子之爲_レ師、習_二諸典籍_一。是本朝之儒風之始祖也。儒學於_レ是興。則我朝學校之權興也。爲_二封戶_一以_二大和十市縣_一賜_二食祿_一。今大和國十市郡百濟郷是也。王仁及_レ歿。河内文始祖博士墓與紀書、葬_二河内國交野縣藤坂村_一造墓。則藤坂村民稱_二字御墓谷_一。土俗於爾之墓誤訛。

禁野和田寺住侶 道俊

元和二辰年正月

さてこの記録を見た並河氏とは丹波の人、その諱永、誠所と號し、幼少の頃から京都に出て、伊藤仁齋の門につき、高足の名があつた。享保の頃その友人關祖衝の遺志をついで、五畿内誌を編せんと志し、官許を得て畿内各地の古跡名勝を巡歴六年の後、輿地通誌五畿の部六十一

卷を成したのが文政二十年であつた。今日傳うる攝津志・河内志等は各、その一部である。即ちこの人西村道俊しるすところの王仁墳廟來朝記を讀んで、日本儒學の淵源を知り、感激措くあたわざるものゝあつたのは、この人にして然るべきであつたのである。又この記をもつた西村道俊は、現在北河内郡津田西村勝三氏所藏西村家系譜に詳かであつて、西村家祖先は王仁博士の遠孫百濟廣國（天平八年卒）に發し、大和國十市郡百濟郷に住んでゐた。その後播磨の國にうつり、代々播磨田宿禰、播磨田連等播磨の名家であつたが、兄弟多く、東西南北の村々に分れ住んで、各東村西村等の姓を名乗り、室町末期西村姓は河内國交野郡に在住、畠山氏に屬して攝河處々に轉戦した。天正の頃西村大學助俊秋は豊臣家の臣となり、それに三男一女あつて、長男は早世し、次男は道俊、三男は俊勝である。三男俊勝は武を嗣ぎ、後豊臣家のため大阪の役に陣歿したが、次男道俊は生來病身のため、今の枚方市禁野和田寺に入つて得度し、師道觀坊につかえて佛學を修めた。師の死後その寺をあづかつて住職となり、こゝに永住したが、常にその祖先を慕ひ、元和二年の頃往古を顧みて、王仁墳廟來朝記をしるし、後世に残したものである。

その後百十五年を経た享保十六年、前記の諸國巡歴の

途にある並河五市郎氏が、右の禁野和田寺に来て、はからずもその道俊坊の記した古記録を手にするこゝとなつたのである。氏はその後巡歴をつゞけて、交野郡藤坂村に御墓谷を訪ひ、そこに皆むした一個の自然石の置かれてあるのを見、日本儒學の始祖たるべき人の墳のかくあるべきにあらずと嘆き、當地の領主久貝因幡守の代官役所長尾陣屋へ出てその由を告げた。その頃の代官鈴木代右衛門及び田中茂右衛門の兩氏は、文學に志ある人々であつた爲、よくその意を了解し、因幡守久貝正順氏にはかつて、「博士王仁之墓」の銘ある方柱を立てることゝなつた。これが今日自然石の碑の側に立つ第二の碑である。

當時はこのような碑が建てられても、この地方の人々にはそれを顧みるものはほとんどなかつた。したがつて墓域はたゞ荒れるばかりで、雑木の丈高く繁るがまゝであつた。この頃の様子を知り得る資料には、第二の碑建てられてより約二十年後の寛延三庚午年、長尾天神宮へ奉納した句額に、近江八景になぞらえて長尾八景なるものを見立て、久貝氏陣屋の武士達や、近村の庄屋で句作に興味をもつ人々の作中より、一景一句づゝを選んで掲げたものがある。その中に王仁塚のことをうたつた句として次のようなものがある。

一背夜雨

いちの背の夜の時雨の茂哉

一背は王仁塚附近一帯の地名で、墓石の所在もわからぬ程に繁るにまかせた雑木の葉に、夜の雨がふりかゝる陰惨な光景をえがいている。こんなに人々から疎まれた時代の王仁博士は、地下にいてまことに鬼哭々たるものがあつたであろう。このように當時の人々が、わが文教の始祖の墳に無關心であつたということは、現代の知識人としては不思議のように感じられるだろうが、それは今日のように、王仁博士の業績や墳墓の存在の宣傳が充分成つた時代と、それ以前の全く認識の空白な時代との相違であらう。

この句額の奉納あつた年から六十七年の月日が流れて、文政十丁亥年となる。當時王仁塚の荒廢はその極に達し、繁茂せる叢林中に二基の墓標をもとめることは至難な程であつた。この頭招提村(現在枚方市)家村孫右衛門は京都有栖川の宮侍をつとめていたが、かねてより同氏は王仁舊記を所藏していたので、同官家の儒臣漢部公明は、家村氏の親族なる山城國葛野郡太秦村大石兵庫とともに、孫右衛門に王仁墓碑建設のことをはかつた。そこで有栖川宮幟仁親王に請うて、碑の表に「博士王仁墳」と五字の御染筆をねがい、又建設費の中へ若干同官家よ

りの寄附を受けた。こゝで儒臣漢部氏は家村氏所有の王仁舊記・寄附帳等一切の書類を携えて、近畿諸地方へ寄附金の募集及び詩歌をもとめて大いに奔走した。こゝに家村・大石氏等は發起人となり、漸く現今の墓碑を建設することができた。これが今日西側小丘にある第三の碑である。建設當初のこの碑は今の位置即ち小丘上にあつたのではなく、今日境内西の入口を入ると、右側にある杉の木的位置に建てられていたのであつた。その後更に寄附金を募り、石玉垣や其他の營繕に着手するために、漢部氏は丹波方面へ行つたが、そのうち杳として普信を絶つにいたり、その行動は一切不明となつてしまつた。家村氏等はやむなく官に訴へ、行先を捜査したが、遂にそのまゝ歸つて來なかつた。こゝで残念なのは、漢部氏携行の家村氏所有であつた王仁舊記が、失踪と共に失われた事であつた。右文政十年の事の次第は、津田町長尾戸川教了氏所藏の、明治二十五年頃に記された「河内國交野郡招提村家村犬次郎よりの開書」なる記録によつたものである。

その後約四十年で江戸幕府は崩壞して明治維新となり、更に二十數年を経過して、明治天皇より教育勅語の發布があつて、國民の道德の向うべき理想を明かにせられたため、忘られた我國文教の始祖の墳墓ある當菅原村

は、これを世に顯彰するは我等のつとめであると、時の村長山中興三郎及び寺島彦三郎氏を中心として、村内有志者は結束し、先づ墓域の擴張をはかることゝなつた。

當時長尾勝圓寺内の假村役場に、王仁塚擴張事務所を設け、時の大阪府知事山田信道氏の認可を得て、ひろく寄附金を募つた。これによつて墓域周邊千五百餘坪の民有地を買収して、墳墓地へ寄附し、又墳域周圍に石垣と土手をめぐらした。そして更に墓域の整備をしようとした矢先、勃發したのが日清戦争であつて、この事業は一時中止のやむなきにいたつた。

ついで明治三十二年仁徳天皇千五百年の紀年祭を、大阪市高津神社で行われるにあつて、その附祭として當地でも大祭典が舉行せられた。その祭には大阪府知事菊池侃二氏や奈良縣知事寺原氏等も參列して、實に盛大であつた。當時村では寺島彦三郎氏村内にはかつて、去る明治二十五年計劃せられた墓域擴張の繼續事業を、この機に進めようとして、時の北河内郡長向日保雄氏を發起委員長として有志團體を組織した。こうして大いに土工を起して墓域の重修擴張、および一大紀念碑を建設して、文教始祖の功績發揚をはからうと、全國に叫んで資金をもとめた。この時隣村水室村には衆議院議員深尾龍三氏があつて、東京方面にもこの趣意宣傳のために活躍した

ので、當時中央の顯官に多數の賛同者を得た。その賛成者名簿を見るに、山縣有朋・松方正義・伊藤博文・西郷從道・大隈重信・桂太郎・清浦奎吾・會根荒助・山本權兵衛・大倉喜八郎氏等をはじめ幾百人知名の士の署名を見ることができる。當時の模様をかたる長尾勝圓寺戸川教了師の話によると、この墓地東側の道路に面して無數の大きい寄附立札がならび立ち、それには新聞で見る中央顯官の嚴めしい名前と、莫大の寄附金額がしるされてゐるのに、村人達は驚いたことである。又この時の計劃として文政の頭第三の碑を建てるにあつて、有栖川宮幟仁親の染筆を下された緣故によつて、このたびも同じ有栖川宮の威仁親王筆に成るものを建設しようとして、すでに宮の御許しを得ていた。この舉あるについて村では資金の一助にもと、人々集つて王仁頼母子講なるものを組み、村民も一體となつて、この建設に盡したのである。けれどもどうした事であろうか、王仁博士に關する事業はいつも戦争によつて阻まれる。此度の建設もその事業半ばで日露戦争となつてしまつた。折角奔走して約を得た資金も、國家の軍資金徵達等のためにこちらへ充分集らず、遂に計劃の幾分の一にもならない事業で終らなければならなかつた。この期に出來上つたのは境内の北寄りに方形の盛り土をして、それには堀をめぐ

らし、又正面には石段を設け、文政年間に出来た第三の碑をその丘上に移し建て、方墳のようなものとした。

更に小丘の東北に小さい茶所を建て、参拜の人の休憩の便とし、そこに墓守りが一人居ることゝなつた。今私の手許にこの建設の中心となつて、最初より苦心經營した寺島彦三郎氏の編する「文學始祖博士王仁」なる小冊子があるが、この巻頭に當時（明治四十一年）の墓域内の寫眞があつて、よく當時の狀況を知ることができる。

その後日露戦争は終り、四十三年には日韓併合のことなどもあつたが、歐洲戦後の反動思潮に發する、健全な國民美風の退化救済、更に當事の内鮮を結ぶ融和は、國民の宗教心よりとの點に着眼した山田七平氏は、同志を得て王仁神社建設の擧となり、昭和のはじめ、その地を王仁塚の側に求めることゝなつた。そこで昭和二年神社創立を出願し、大阪府社としての許可を得て、同社奉賛會が組織せられ、小笠原長幹氏がその會長となつた。こうして昭和四年には李王家から下賜金あることなど、李王職長官から内達せられ、同五年には奉告祭と地鎮祭を行つた。祭の當日は文部、拓務、内務、大藏の諸大臣や朝鮮總督等よりの祝電は六百餘通に及び、片町線は集る人々のために別仕立の臨時列車を、長尾驛まで増發した程盛大なものであつた。こうした出發の華やかなるにか

ゝわらず、その後の建設經過抄らず、ついに山田氏は資金を得るため單身大陸に渡り、博士王仁の父なる鸞翁の故地を支那山東省蓬萊縣に訪ひ、各方面に奔走したが、遂に滿鐵會社より出資を約せられて歸國し、其他有志の援助によつて、先づ墓邊に莊重な石玉垣をめぐらし、又石燈を建てた。時恰かも支那事變の始りの頃であつて、國民の意識は一途に戦争に傾きつゝあり、更に時代は第二次世界大戰へとつゞくので、山田氏の雄大な建設計劃も、惜しむべき結果となつてしまつた。

第二次大戰の終戦も迫つた昭和二十年の春、當墓地の南に陸軍病院が建設せられるとき、其人夫として集つた人々の中に多くの朝鮮出身者があり、彼等は王仁塚の北に假屋の部落を作つて居住していた。最初のほどは四十數家族も密集したが、終戦とともに歸國する人も多くあつて、十年後の今日では十數軒にさびれている。この部落の南に日夕みる墳墓は、往昔の來朝者王仁博士の埋葬の地と聞くにつけて、追慕の念やみがたく、その年の秋から部落のもの皆墓前に集つて祭りをはじめ、以後毎春舊曆三月三日には墓前祭を行つて、すでに十年を経過している。舊曆三月三日を祭日としたのは、燕の來る頃という意味で、博士墳墓の近くに集つた彼等の望郷の念がしのばれ、それを聞く私等も心をうたれる話である。以

上はこの部落に住んでいる田金出氏を訪ねての話であつたが、その時氏は昨年祭にこの地居住十周年にあつたといつて作つた詩を示された。

博士王仁夫子之墓奉仕拾周年追慕詩 金剛山人

朝鮮千字入德門 論語七篇立道誌 文教始祖王仁師

歸國何故今時遲 使任身體百濟士 死有白骨日本地

恩魂眞靈長不散 億秋萬古藤坂指 東洋琵琶弄手謠

分明願恨曲中志 人生之事如流水 傳學々習永世知

一錢一合誠心集 十年奉仕植物示 雙照爰香老告木

青節細葉和陽枝 圓形石前歲伏納 三月三辰春祭期

金剛山人は田氏の雅號である。この詩にあるように、墓前にはこの人々の手によつて松が植えられ、今その松は次第に大きくなりつゝあるが、毎年の春祭はその側で行われているのである。

以上で王仁塚についての記事を終るのであるが、終りに少々考古學的立場からの私見を申してみる。(一)王仁博士は河内の史首として應神仁徳朝の高官であつたから、その墳墓を營むにも庶人とことなり、鄭重にあるべきであり、しかも當時は大墳墓築造の最盛期であつたから、彼の墳としては、前方後圓式の雄大なものを期待して當然のことであろう。(二)當時の古墳として南河内郡道明寺附近の應神陵、或はその周圍の諸陵とそれらの陪塚、或

は泉北郡の仁徳陵やその附近の諸墳に見るように、洪積臺地上に盛土をしているが、それらはたとい破壊されていても、尙お洪積層の層土と盛り土の層とは明かに見分けることができる。したがつてそれら諸陵墳と時代を同じくするこの王仁博士の墳墓にも、その盛土層が當然見出さるべきである。(當地も同様洪積臺地であるから條件は外の陵墓とかわらない。)(三)又當時の墳上には埴輪圓筒が無數に列をなして、幾段となくめぐらされていたから、後世においてどのように墳形が破壊されるとしても、その所在地附近一帯に、幾千となく散亂したであろう埴輪圓筒の破片は、必ず後世の人々に墳墓の存在と大體の位置を暗示するだろう。(四)葬りの際に用いた土器片の散亂もあるだろうし、又玄室や羨道を構成した巨大な石材や、石棺、木棺なれば鐵釘、棺内の朱の粉末、其他副葬品として各種の寶器等も、その一斷片位は表面或は出土のいづれかにおいて發見せらるべきである。私は以上に述べたような期待をもつて、この王仁塚附近一帯の地を隈なく幾年間、又幾たび歩きまわつたとだろう。私の見たものは南へ三町ばかり距る長尾病院の西南で、須惠器の破片二個が單獨に落ちていたのがあつたのみで、外には右に示した諸條件の中の一にでも該當するもの、即ち考古學上この土地を王仁墳と推定す

べき資料の一をも、こゝに見出していないのはまことに残念である。又種々の記録にあるごとく、最初よりあつた自然石の碑、即ち享保十六年並河五市郎氏が王仁墳なりと指定せられた古碑は、考古學者の否定を招く資料となるものである。即ち應神仁徳朝時代の墳上に碑石をおくということは、全くその例を見ないものであつて、碑石はその後佛敎渡來して幾百年の後、墳丘ある墓制が次第に改められた中世時代のもつと見ざるを得なくなる次第である。さばあれ私はこの墳墓の傳説資料の多くをしらべ、殊に私がこの墳のある津田町民であるがために、どうかしてこの墳墓が王仁博士の墳墓であるべく、考古學上よりの確證を得たく思つて、今もその發見に努力しているものである。幸にして何人か今日までの私のこの墳に對する觀察に見殘すところのあつたことを發見せられて、考古學上當時代の墳墓であるとの事實を示して下さるならば、幸これにすぐるものはないのである。

(昭和三〇・八・六)